



TITLE:

清代前期における國家と錢

AUTHOR(S):

足立, 啓二

---

CITATION:

足立, 啓二. 清代前期における國家と錢. 東洋史研究 1991, 49(4): 671-697

ISSUE DATE:

1991-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154356>

RIGHT:

# 清代前期における國家と錢

足 立 啓 二

- 一 錢 法 不 通
- 二 錢需要と錢供給
- 三 國家的支拂いと錢
- 四 錢の再生

## 一 錢 法 不 通

通常錢經濟から銀經濟への移行過程と考えられている明清期が、一面ではむしろ錢流通の擴大過程であり、この過程を通じて、國家的支拂いによって裏附けられていた從來の錢が、新しい機能的意義を獲得してゆくという展望を、若干の小稿を通じて提示してきた。<sup>(1)</sup> 本稿では先稿の結論をとりまとめた上で、明代後期く清代前期における錢流通の展開を、とりわけて國家との關係において明らかにし、先に提示した展望の一部としたい。

一五世紀中期から、錢流通は極度の混亂に陥る。制錢と舊錢の相對的に安定的な流通は、私鑄錢に取って代られ、私鑄錢のなかでもより低品位な錢へと、貶質化が進む。錢行使圏は、一縣あるいは一鎮ごと、あるいは都市内の坊郭ごとに分裂し、特定の錢が局地内で選好され、かつ選好される錢自身が、地域内でも變動を繰り返すという不安定な状態にたち至る。京師から始り、次第に地方へと擴がったこの錢法解體の中で、多くの錢不行使地域が表面化する。錢行使がまがりな

りにも存続したのは、京師を始めとする沿海諸省のみであつて、從來から子安貝行使地であつた雲南など邊境地域だけではなく、江西省や山西省など比較的先進地に近い地方も含め、大半の地では、錢ではなく低品位の銀や米穀・鹽などが流通手段とされていた。從來から錢の流通していた地方でも、錢は多様な貨幣諸機能の幾つかを喪失し、流通停止に陥る地域も生まれる。錢が存在しなかったわけではない。從來は錢が流通していた地域も含めて、錢への信任が失われてしまつたのである。

この錢法解體の過程は、江南折糧銀に始まり、明朝が銀財政に移行していく過程と、時期的に一體の關係をなしている。錢および錢建て通貨としての鈔は、國家財政に組み入れられること自體少なくなり、組み入れられる場合においても、それは市場での流通と切斷されていた。制錢非流通の條件下で、關稅等の一部として納入される錢も、實際には銀建て納入のうゑ、金融業者によって制錢に兌換のうゑ包納されたし、財政上必要な錢は、直截に金融業者から銀で買ひ付けられた。

國家的支拂い（國家への支拂いと、國家からの支拂い）から錢を排除したこと、とりわけ國家への支拂い手段としての錢使用を放棄したことが、錢信任の解體の原因であるという認識は、當時の政策家の間に共有されていた。<sup>(2)</sup>京師においてさえ錢そのものの流通が停止するという事態に際し、王家屏・魏時亮以來、多くの論者が、國家財政に錢を組み入れることが錢法疏通の條件であると主張してきた。陝西道御史馮應鳳は言う。<sup>(3)</sup>

官の之を民に給するが如きは、則ち銀錢參用し、民の之を官に輸するが如きは、則ち盡く其の錢を去る。夫れ上の必ず棄つる所、其の下を強令せんと欲するも、誰か則ち之に應ぜん。……謂えらく、宜しく京城直省の各官司に通行し、凡そ房號稅贖より、以て存留起運錢糧に及ぶまで、一切の收支徵解は、俱に銀錢相い兼ねしむべし。

顧炎武の言を借りるなら次のようである。<sup>(4)</sup>

今の錢は則ち下りて上らず。僞錢の日に售く所以にして、制錢の日に墮がるは、未だ必ずしも此に由らずんばあ

らざるなり。請うらくは、略ぼ前代の制に倣い、凡そ州縣の存留支放は、一切錢を以て之に代えん。

事實この觀點から、收錢の令が幾度か下された。成化元年七月の疏通錢法の詔は、錢法解體の初期に、幾度かの論議の後に出された、從來鈔だて徴收であつた課税に錢を繰り込むとの表明であつたし、<sup>(5)</sup>萬曆四年四月には、戶科給事中周良寅の請に従い、存留錢糧を銀錢兼收とすることが裁可されている。<sup>(6)</sup>またその後も幾度か收錢の令が下されるが、<sup>(7)</sup>『欽定續文獻通考』が、萬曆一八年六月になつても依然として先の馮應鳳の奏疏が出されねばならなかつた状況を前に總括しているように、<sup>(8)</sup>再三出された收錢の令は具文に終り、折銀の流れは不變であつた。

國家の制錢供給不充分を錢法解體の原因とする議論も、時に見受けられる。<sup>(9)</sup>確かに明朝の鑄錢活動は總じて低調で、宣德通寶の後、銀財政への移行とともに、暫く停鑄が続く。弘治通寶の鑄造は短く、嘉靖期の鑄錢も不安定で量的にも決して多くない。この結果、市場における流通手段は、一時は極度な低品位錢に一元化され、國家への局部的支拂いのみ、市場から切斷された制錢が機能するような事態まで生まれた。

萬曆期には鑄錢意欲は上向く。萬曆四年に始められた萬曆通寶の鑄造は、四月より各省一體開鑄へと擴大された。<sup>(10)</sup>時機尙早のこの全國開鑄策は、錢の全く流通していない多くの地域を前に、容易に受け入れられなかつた。<sup>(12)</sup>遂に一〇年三月に、市中では二〇文で銀一分に過ぎない新鑄錢を一〇文一分の官價で支給したことを引き金に浙江兵變が發生し、<sup>(13)</sup>九月には皇太子誕生の大赦とともに、全國的鑄錢は停止された。<sup>(14)</sup>

増鑄は萬曆一三年の一五萬錠鑄造の命より始り、<sup>(15)</sup>二七年・二八年以來の増鑄策によつて本格化していく。<sup>(16)</sup>とりわけ南京では、二〇年代を通じて續々と増爐され、<sup>(17)</sup>ついに三〇年代前半には六〇〇座に達し、<sup>(18)</sup>南京城内だけでなく周邊の地域へ流出・供給されていった。<sup>(19)</sup>他の地方でも二八年に湖廣、三三年に貴州などで開鑄されるに至る。國用不足を補うための、限りある銅材を追つての増鑄政策であつた。こうした増鑄策も與り、明代後期には、私鑄錢だけでなく、制錢もある程度の地域においては、流通手段としての機能を果すようになる。

明の最末期を除けば、京師を中心として明朝の制錢は公定の錢價を維持したとの見方があり、清初の錢價設定に際しても、明朝の比價が取り沙汰される。しかし制錢は萬曆以降になっても、決して公定の比價を保ち得たわけではない。萬曆一三年には、初鑄の時に一〇文一分と規定された萬曆金背が五文一分となり、都市の錢生活者に困難を來していたし、萬曆三十九年には逆に、二七年に一錢五〇文と規定した官價が、一錢六六文の市價と乖離をし、商人への搭放に不都合を生んでいた。<sup>(22)</sup>國家には比價を設定し維持する能力はなかった。

この時期の錢が、國家の信任によって通行しているかのように見える事態がある。政治不安が錢價を失墜させるといふ、ネガティブな形でそれは示される。天啓期より明確に錢質を低下させつつも、崇禎初期までは破局をむかえずにいた錢價は、明王朝の先のみえた崇禎中に下落し、王朝崩壊とともに素材價値を割り込んで、單なる銅材以下としてしか評價されなくなる。<sup>(23)</sup>清朝成立當初も、順治錢は容易に信任されず、一旦値が付き始めた清朝の制錢も、三藩の亂發生とともに暴落する。<sup>(24)</sup>

しかしこれらネガティブな現象は、錢が國家信任によって機能していたためというより、王朝崩壊によって錢の通用力が行政的に否定されることを見越した、市場における投機的な錢信任の消滅と見るべきであろう。事實、通行停止した錢も、やがて再生する。<sup>(25)</sup>同様な事態は、明朝盛期においてもみられる。萬曆帝の死去は、精力をこめて鑄造されてきた萬曆錢を一時的に棄物としたし、<sup>(26)</sup>萬曆一五年には、嘉靖金背が突如市場で通用しなくなる。

制錢そのものが國家的信任を離れて、國家の意に反し、信任と不信を繰り返すことの典型は、次の事態に見られる。

世廟制錢、金貝と曰い、旋邊と曰う。錢は一なり。圍徑厚薄同じ、銅液を範する同じ、制文同じ。泉府之を高下する能わず。初時、旋邊盛行し、市肆の貿易は、唯だ旋邊もて准と爲す。如し貫錢内に、偶ま一金貝、其中に亂まじわれば、則ち謹別して之を出し、旋邊と同售するを得ず。人の金貝を見るや、則ち銅もて之を視る。……曾ち未だ三年ならずして、金貝復た盛行す。民間積む所の施邊は、則ち之を破箇中に綴る。余因りて諸を市人に問いて曰く、錢は金貝精

なるか、と。曰く、一なり、と。奈何なれば旋邊を行せず、と。曰く、市行せず、故に行せず、と。曰く、據りどころ有るか、と。曰く、無し、と。嗟夫世の據る所無くして用舎する者は、獨り錢のみなるかな。(27)……

ここには、國家的信任からも、その素材價值すらも離れて、流通圏内部の記號としてのみ信任されている錢の姿が、端的に示されている。

狹隘な地域内の錢信任を左右するのは、該地の金融業者達であつた。通行錢種の不時の變動は彼等の操作によるものとされ、しばしば取締りの對象となつた。(28)錢の行・不行が彼等の恣意によつたという當時の評價は過大かもしれないが、國家的支拂いに裏附けられる信任を錢が失つた時、地域内の兌換機能を掌握し、外部からの貨幣流入を掌握し、市場と切斷された國家への錢支拂いも擔當する地域の金融業者達の信任によつてしか、錢は通用しなかつた。市場による經濟の廣域的統合が不充分である時、錢行使の範圍は局地的なものとなり、不安定性を伴わざるを得なかつた。こうした條件の下では、不安定な錢よりも、米穀や鹽・布、あるいはこれらと同じく現物貨幣の一つである秤量貨幣としての銀の方が、より素朴な信任を獲得し易かつた。

局地的錢信任・流通不安定・私錢横溢・現物貨幣の盛行ということ自體は、必ずしも新しいことではなく、專制國家が錢を財政の基軸としなかつた時代に、しばしば見られた。(30)錢はその素材價值によつて常に通用する自明の貨幣ではなかつた。國家の信任によらず、専ら市場の流通手段として廣範な信任を確保し得るようになった時、それは本格的に新しい意義を持つのである。

さて、明代中期に現出した錢の不行使と分裂・不安定は、清代中期以降の、錢の廣範で大量な流通と對照的である。清代後期になると、既に銀貨の箇數拂いの習慣が廣まっていた華中以南の沿海都市部を除いて、中國の殆んどの地域は錢遣いであつた。(31)まこと中國は用銀の國ではなく、用銅の國であつた。しかも清代中期にさかのぼると、江浙など清末には銀貨流通圏となつていた地域も、錢遣い圏であつた。(32)既に、雍正期の錢問題については佐伯富氏の詳細な論致があり、乾隆

期に急激に進んだ錢需要擴大と錢貴については、黒田明伸氏の專論がある<sup>(34)</sup>。以下では、多くの事實認識をこれらに負いながら、明代からの展望の中で、清中期の錢の大擴大期に至るまでの國家と錢の關係を検討し、錢流通擴大の歴史的意義を考える。

## 二 錢需要と錢供給

清代中期以降の廣範な錢流通に、清朝による鑄錢が與り、その素材の一端を提供したことは事實である。錢需要の擴大と、鑄造・供給の歴史を、乾隆二〇年代の鑄造極大期まで、時期を區分しながら追ってみよう。

### I 順治初～康熙九年

京師とともに全國的な鑄錢が追求され、それが當面放棄されるまでの時期。

鑄造差益の獲得が、鑄錢の重要な動機であつたことが、この時期の一つの特徴である。内庫銀や鈔の發行に手がつけられるほどの中央財政は勿論、<sup>(35)</sup> 地方でも當初安定した徴税は未確立で、地方財政補填のためにも、鑄錢は重視され、<sup>(36)</sup> 差益獲得は、一貫した公然たる鑄造理由であつた。<sup>(37)</sup> 戸部も鑄造額以上に鑄息に注目し、<sup>(38)</sup> 事實、多くの資料は鑄息報告として残されている。鑄造動機においても、この時期は明代後期の鑄造政策と連續性を持つ。

この鑄造動機は、鑄造收支の計算方法と鑄出錢の運用法をも規定する。銅材は上質品で一斤六分五釐という公定の銅價で強制的に買い上げられ、鑄造された錢は、一律一兩一〇〇文という公定錢價で兵餉として搭放され、この操作によって必然的に生じる利益が鑄息とされた。このカラクリとその問題性は、康熙八～九年の地方鑄造停止をめぐる論争の中で批判の俎上に登る。<sup>(39)</sup> しかし問題は早い時期から現われていた。<sup>(40)</sup>

差益をめざす強い鑄造意欲にもかかわらず、この期の銅材供給は困難であつた。雲南銅の產出は未だ本格化しておら

ず、日本の銅も、鄭氏の海上交易權掌握により、未だ順調には中國にもたらされなかった。銅供給困難の面でも、この期の鑄錢は、明代後期と連續性を持つ。中央は關差への割りつけにより銅を確保したが、地方の安定供給は困難であった。

福建や河南の非産銅地においては、主要には銅器や舊錢を里甲に割りつけて強制買い上げすることによって銅を確保したが、銅器・舊錢の搜括の後、銅確保は困難に陥った。<sup>(41)</sup> 東洋銅・滇銅の買い付けの相對的に容易な江南の地でさえ、それ自身銅材確保に苦しむ山東・河南に買い付けに走らねばならない有様であった。<sup>(42)</sup>

銅材供給の困難もあって、地方における鑄錢は極めて不安定であった。華北軍事據點における鑄造から始り、領有の擴大とともに全國に廣がった鑄錢も、順治八年には大幅に削減され、<sup>(43)</sup> 各省一局五〇爐以下、寶泉局・江寧局各一〇〇爐となる。<sup>(44)</sup> 一〇年には江南をはじめ三〇四座が復設されたが、順治一四年九月には停鑄の決定となり、<sup>(45)</sup> 一月から一二月にかけて次々と停止された。<sup>(47)</sup> 一七年には雲南開鑄を含めて各省再開が決定されたが、康熙元年には、恐らく各省殆んど實績をみないまま停鑄となる。<sup>(49)</sup> 康熙六年に決定された再開鑄は、<sup>(50)</sup> 齒る地方官を押えて戸部の主導のもとに實現したが、<sup>(51)</sup> 都察院等の強い反對にもあって、康熙九年には停止となり、<sup>(52)</sup> こののち雍正期に至るまで、全國一齊の鑄錢はみられなくなる。

開鑄の動機が差益獲得であった時、停鑄の理由は、錢價の實現困難であった。鑄造された錢は、到底、期待通りの價格では市中に受け入れられなかった。順治初期の全國開鑄政策においても、錢が受容されそうもない雲南・貴州・四川・廣西は、慎重に對象から外されていたし、<sup>(54)</sup> 盛京・延綏でも、開鑄後まもなく「錢文は尙お急需に非ず」との判斷から鑄造中止となり、以後復活されることはなかった。<sup>(55)</sup> こうした周邊地域を除いても、開鑄後まもなく錢賤あるいは錢過剩が表面化する。公式には一兩一〇〇文の公定錢價が維持されたものの、京師においても、新王朝の威力が一時的に強制力を發揮した順治初頭の錢貴を除けば、<sup>(56)</sup> かなりの低錢價が続く。<sup>(57)</sup> 地方の停鑄も制錢の非受容、錢過剩、錢賤を理由としていた。順治八年の各省爐座削減は、戸部尙書車克によると錢の壅窒のためであった。<sup>(58)</sup> 順治一四年の地方全面停鑄は、「錢愈多く、愈賤し。私錢公行し、官錢壅滯」のためであった。<sup>(59)</sup> 康熙元年の停鑄は錢賤のためであり、康熙九年の停鑄の背景には、銅



價は公定價より高く、錢價は公定價より低く、鑄息が形骸化している實情があった。<sup>(60)</sup> 鑄造された錢への需要の弱さが、地方停鑄の理由であった。

鑄造額については不明な部分が多い。『清實錄』の歷年末尾に附された鑄錢額<sup>(61)</sup>が、いかなる値を意味するかも確かではない。寶泉局による鑄造額とみなす見解も存在する<sup>(62)</sup>が、檔案類の公開によって、順治一〇年代の寶泉局鑄造額は、工料こみで二三〇二五萬貫程度であることが明らかとなった。<sup>(63)</sup> 最大で年間二六〇萬貫に達する實錄の値は、寶泉局に寶源局を加えても及び得ない。地方局の開停との照應から考えても、<sup>(64)</sup> 少なくとも順治期は、恐らく雍正期も、寶泉局鑄造額に戸部の掌握する地方局の鑄造額を加えた値であろう。

地方鑄造額を各々に把握することは困難である。江寧局の順治七年の三〇萬貫餘、八年の約二〇萬貫など、幾つかの個別の數値<sup>(65)</sup>を知り得るに過ぎない。主要に残されているのは、先述のとおり鑄息報告文書である。但し、この期の鑄息計算が、原料銅價と鑄出錢價を固定して計算されている以上、鑄息と鑄造額は相關するはずである。<sup>(66)</sup> 主要地方局の鑄息の一端は末尾の附表Aに、寶泉局・江寧局および順治八年以前に停止された地方局の鑄息は、附表Bに示したとおりである。京師とともに、江寧をはじめとする沿海部主要地方局では、かなりの鑄錢が行われていた。實錄末尾の値は、これらを集計したものであり得る。

しかし、最高年間二四〇〇二六〇萬貫に及ぶ鑄錢報告額が、現實の錢供給量の増加を意味するかには、疑問がある。眞に鑄造されたとしても、舊錢・廢銅の改鑄は、多く舊錢から新錢への強制的轉換であった。報告の眞憑性にも疑問がある。市價と無關係に銅材の供出が割りつけられ<sup>(67)</sup>（錢は最も入手容易な銅材であった）、改鑄され、市價を無視して搭放された。されば、差益報告の財源を確保した上で、鑄錢しないのが最善であったはずである。王朝成立期の緊張を考えても、最大年間二六〇萬貫の錢が市場に追加供給されたとは考え難い。

しかしともかく、この時期かなりの制錢が鑄出された。だが、市場で充分な價值を信任されないまま、地方鑄造は停止

された。

## II 康熙九年～康熙末

京師では、ほぼ安定的に鑄造が續けられるが、地方の一齊鑄造は停止され、銅供給の容易な一部地方で、個別的かつ比較的短期的に鑄造がなされた。

京師では、關差・鹽差・内務府商人・八省督撫など辦銅主體は移り變つたが、いずれにせよこの時期比較的輸入が順調だった東洋銅を主要な銅材とした。康熙前半期には寶泉局二十數萬貫、寶源局十數萬貫、康熙五〇年ごろから増加し、寶泉局四五萬貫、寶源局二二萬貫餘りに達したと言われる。<sup>(68)</sup><sup>(69)</sup>

地方の鑄造は極めて不安定である。東洋銅は京師に集められ、滇銅生産は未だ不充分であつた。地方錢局の開停については、實錄・地方志等にも、總じて會典以上の記述を残していることが少ない。さしあたり、主に會典により、各地の開鑄決定から停鑄までの期間を示すと次のようになる。<sup>(70)</sup>

廣西康熙一八年～二〇年。廣東二五～三一、三四～三七。福建一九～二一、二四～三四。臺灣二八～三一。浙江三五～三八。雲南二〇～二八。湖北二六～三八。湖南二二～三九。

この時期、差益獲得という順治期の動機に代わり、錢の非流通・あるいは制錢非流通の事態を改善することが、鑄造理由の前面に現われてくる。康熙二五年の廣東開鑄は、兩廣錢法不行を打開するためになされたものであり、康熙二四年の福建開鑄は、明季舊錢を除去して制錢を通用させることを目指していた。<sup>(72)</sup>康熙二七年の臺灣開鑄は、同島平定後、鄭氏の偽號錢文を驅逐しようとするものであつた。<sup>(73)</sup>

しかし、これら鑄造意圖は、いずれの地方でも充分満たされなかつた。康熙二〇年に開鑄決定された雲南の鑄錢が、現地への供給を意圖する限り失敗に終ることは、目に見えていた。同地では、そもそも錢が殆んど流通していなかつた。二

四年二五年には早くも錢甚だ賤しきを理由とする巡撫の減鑄の請がなされる。<sup>(74)</sup>二七年には一兩一〇〇〇文で搭放する錢が、三〇四錢にしか評價されていないことが報告され、<sup>(75)</sup>二八年、ようやく停鑄に至る。廣東では三四年に開鑄決定されるが、<sup>(77)</sup>三七年三月には開鑄三年で錢文倍増し、錢價ますます下り、一〇〇〇文が三錢二〇三分となり、<sup>(76)</sup>五月には停鑄に至る。鑄出錢ストック放出のために續けられた兵餉の搭放も、一層錢價を引き下げ、ストック封閉のままで廣東鑄錢は幕切れとなる。<sup>(78)</sup>湖南・湖北は比較的長く鑄造を續けることができたが、三八〇九年に停鑄となる。その理由は、ここでも「錢壅滯に易く、價直賤しきに過ぐ」であつた。<sup>(79)</sup>

雲南では需給ギャップが最も激しかった。湖北・湖南では、これと様相をかなり異にしていたと思われる。それはそれ自身意味がある。しかし大勢として、錢需要をめぐる順治・康熙初の事態からの轉換は不充分で、京師からの流出分を除いては、地方への國家からの、さしたる錢供給は無かつた。

### Ⅲ 雍正期

錢需要をめぐる新しい事態が明らかに始つていた。しかし需要擴大への鑄造・供給という對應は、全國的には未だ充分行なわれなかつた。

乾隆期に全國的に突出する錢貴は、この時期、京師では既に顯著に現われていた。<sup>(80)</sup>康熙六〇年には、從來一兩八八〇文であつた制錢が七八〇文まで上昇し、<sup>(81)</sup>六一年には錢貴への新たな對策が咨問される。以後連年、京師錢貴の資料が續き、康熙時期に時おり見られた錢貴とは異なる形で、乾隆初頭へと接續していく。しかし京師の錢貴は、實際にはもう少し早くから始つていた。康熙五三年六月に、皇帝は大學士に對し、一兩九二〇文という錢貴になっている現状を語っている。<sup>(82)</sup>また雍正六年には、銅禁の結果一兩九〇〇餘文にまで下つた錢價を、數十年來未だ有らざる水準と自贊しており、<sup>(83)</sup>錢貴は既にかなり續いていた。康熙四五年前後には、京師から山東にかけての私錢盛行と錢安が大きな問題となつて<sup>(84)</sup>いることを考

えると、恐らく京師の錢貴は、康熙五〇年前後から始つたものと考えられ、康熙五〇年からの一卯あたりの銅額増加は、<sup>(85)</sup>こうした事態への對應であつたかもしれない。

この時期、地方においても持續性を持った錢貴傾向は廣まっていた。一方で、一般には錢が使われず、低品位の銀も含めた現物貨幣の流通している地域が、依然として廣範に存在していた。貴州では高額の取り引きには散碎色銀が、小額の交易には鹽が用いられ錢は使用されていなかった。<sup>(86)</sup>四川でも低品位の吹絲銀が流通手段となり、完糧にのみ足色が別銷され、錢は機能していなかった。<sup>(87)</sup>いずれも、明代中期の江西や山西などを髣髴とさせる。省外需要を意識して現地需要を無視して鑄錢が擴大された雲南では、一兩一五〇〇文であつた錢が、一五〇〇文餘りにまでなつてしまつた。<sup>(88)</sup>

しかし、制錢に對して公定比價を超えた値のつく地域も、廣範に生まれてゐた。軍事行動に伴う一時的錢需要の引き起こした錢貴は別としても、雲南で鑄造された錢が湖廣などに、一兩九〇〇餘文で販賣され得る條件が生じていた。<sup>(89)</sup>既に錢貴である京師から地方への錢の販出も問題となつており、乾隆期における大量な地方向け販出の前ぶれとなる事態が、雍正九年ごろには注目されてゐる。<sup>(91)</sup>

京師を中心とする錢貴の原因は、私銷による錢の減少とみなされた。雍正二年の近京省分に對する舊銅回收令に續き、五年の全國的舊銅回收策に至るまで、繰返し銅器の回收が命ぜられた。<sup>(92)</sup>回收された廢錢舊銅は、雍正五年より額外の加鑄に供された。<sup>(93)</sup>しかし京師での増鑄は繼續的ではなく、雲南からの解京錢三四萬貫が雍正末から京師に送られることになるまで、<sup>(94)</sup>京師での錢供給は未だ本格的擴大期を迎えない。

舊銅の回收は地方にも命じられ、雍正七年より各省で開鑄されるが、多くのところで回收された廢銅が盡きるとともに停鑄される。鑄造額自身、決して多くない。江西では雍正五年一〇月から七年九月にかけて回收された銅器を中心に、舊銅一三萬六二〇〇斤を用い、七年十一月から一〇年九月まで鑄錢されるが、<sup>(95)</sup>廢銅より鑄錢する際の寶泉局の規準に照すなら、鑄出額は、一萬三〇四〇〇〇貫程度であつたと推定される。同様に湖南では、八年三月二日に開鑄され、九年九月一

九日停鑄されるが、九年の鑄出額は一萬二〇〇〇貫程度に過ぎなかった。<sup>(97)</sup> 廣東・廣西などの廢銅の回收は、一層わずかなものであった。<sup>(99)</sup> 鑄造の動機は、需要に對應した供給擴大というよりは、依然として制錢非流通と銷毀への對應が前面に出されている。<sup>(100)</sup>

錢需要の擴大に對應して鑄錢を繼續するつもりなら、銅材供給の條件は開けつつあった。東洋銅は減少しつつあったが、通じてみると三〇〇萬斤近くの入が可能であり、額外買いつけの可能な年さえあった。<sup>(101)</sup> 滇銅生産は雍正五、六年から急速に増大してきた。<sup>(102)</sup> 京師寶泉局は、雍正末には何年分もの銅鉛を繰り越していた。<sup>(103)</sup> しかし地方への振り分けも含めた對應は未だなされず、雲南など産銅地を除けば地方鑄造は低調で、雲南からの供給を除けば、地方への供給は不充分であった。

ただしこの中であって、江蘇省の舊銅回收は例外的に精力的であった。雍正八年八月には既に六九萬斤が回收され、七萬餘貫の鑄造が計畫されていたが、<sup>(104)</sup> 一三年閏四月までに回收額は一四〇萬斤となり、<sup>(105)</sup> 巡撫高其倬任内には一二五萬斤が回收され、鑄造の繼續が要請された。鑄造の理由は、江蘇における錢需要の強さであった。<sup>(106)</sup> 先進地においては政策の轉換要求が既に強まっていた。

#### IV 乾 隆 期

京師を中心に注目されてきた錢貴が、この時期一舉に全國化し、それに應えて大量の鑄錢が全國で進められる。

錢貴の展開も、直隸・江蘇等から始り全國へ波及していったものであるが、<sup>(107)</sup> 錢貴の水準自身も、中央に貴い傾向を持っていた。<sup>(108)</sup>

錢貴に應えて、京師では乾隆五年の雲南解京錢の停止を期に増鑄が始り、乾隆一六年、二一年と増卯が續けられ、二五年には寶泉・寶源兩局合わせて匠工物料錢も含めて一四五萬餘貫の極大に達する。<sup>(109)</sup> 地方においても、全國供給の視點から

鑄錢の續けられていた雲南等に續き、乾隆四年の福建、五年の江・浙から、一四年の山西に至るまで各地で開鑄が進み、乾隆二〇年代後半期は地方の鑄造も極大となり、京師を含めた工料込みの額定鑄錢數は三五〇萬貫を超えたと考えられる。<sup>(110)</sup>

以上が清代中期に至る錢需要と國家による鑄錢の經過である。乾隆期に鑄造された錢が、これ以後の錢の流通手段としての地位確立に貢獻したことは疑いない。しかし乾隆期の増鑄は、それ自體錢行使擴大・錢貴の結果であつて、この錢行使の擴大自體は、明代中期に露わになつた錢流通解體現象からの、ゆるやかな、しかし一貫した錢行使擴大過程の、連續的な延長上にあつた。

明代中期に錢がまがりなりにも機能したのは、沿海諸省のみであつた。清代の初めまでに錢行使は既にかなり擴がつていた。しかし康熙帝は「古えより錢法は、未だ本朝の如く流行の廣きもの有らざるなり」と自負したが、<sup>(111)</sup>これはこの時點に至つても、かなりの誇張であつた。雲貴四川など錢の流通しない地方や東北・西北邊などを除いても、順治・康熙期の錢需要は全國的にみて決して強くなく、康熙までの地方鑄錢は、錢の不受容・錢過剩によつて停止されざるを得なかつた。京師から始り、雍正期にはかなりの地方で錢價は高まり、明代中期には錢の非流通が確認される江西・湖廣・山西などでも錢高傾向がみられていた。しかし國家による地方への錢供給は、未だ本格化されなかつた。これら中間的性格を持つ地域においてこの期の錢流通を擔い、乾隆期に至つて錢貴を表現する主體となつたのは、私鑄錢・非制錢であつた。<sup>(112)</sup>

臺灣では從來制錢は流通せず、在來の小錢に對し番銀で相場が立つていたが、これらが乾隆初めに一兩一五〇〇〜一六〇〇文より、一〇〇〇餘文へ、遂には八一二文へと騰貴していく。<sup>(113)</sup>江西で流通していたのは一〇〇〇文で重さ四斤ばかり、模糊破損で上串にも堪えぬような低品位錢であつた。<sup>(114)</sup>同様な事態は、湖廣・兩廣・西北でも一般的に見られた。<sup>(115)</sup>私鑄錢の品位は全く低いものであつたが、しかも官定の銅價を何倍も上廻つて流通することが可能となつており、<sup>(116)</sup>皇帝自身、そのことを充分承知していた。<sup>(117)</sup>

中間地帯で私鑄錢を軸に展開した錢流通擴大は、雍正から乾隆期になって、雲南・貴州・四川方面まで含めた錢流通へと連なっている、往來旅店も鄉僻苗獠も、交易に利便なるを知り、ようやく錢を用いるようになる。<sup>(118)</sup>

### 三 國家的支拂いと錢

供給擴大が流通擴大を生み出したとは言えなかった。では流通擴大は國家的支拂いを通じて支えられていたであろうか。叫ばれつつ實現されてこなかった國家的支拂いへの錢繰り込みは、清朝の下で充分復活したのであるうか。中間地帯における錢流通の擴大が私鑄錢によって實現されていたことは、既にこれらへの否定的な答えを豫告する。

國家的支拂いからの錢の排除は、明末清初期に各地を歴訪した顧炎武によっても確認されている。彼は、銀による徵稅が、在地での銀不足、租稅納入困難、流通手段不足による流通停滯を引き起こしていることに注目し、錢を徵稅に組み入れることにより錢信任を確保することを主張するが、その中で、實際に錢を搭收している山東德州を、例外的な場合として扱っている。<sup>(119)</sup>

確かに清朝は、順治期より錢の搭放・搭收のたてまえを掲げた。先にみた明末清初期の錢信任環滅に際し、錢の租稅への繰り込みを表明する。既に順治二年には新錢七文を銀一分として徵收することを指示していたが、<sup>(120)</sup>順治一四年には、錢の壅滯に直面して、錢糧を銀七錢三の比で搭收し、各々起運と存留に充當するよう定式化する。これに應じ、康熙七年には存留驛站官役俸工雜支等を、<sup>(121)</sup>これまた銀七錢三で搭放するように指示し、<sup>(122)</sup>康熙八年一年にもこの命が申ねられている。この搭放とセットになった搭收が、錢の信用形成に與ったとの認識もある。<sup>(123)</sup>しかし、起運存留比は地方によって異なっていたし、解京部分は全額を銀で要求しつつ、存留部分を銀七錢三で搭放するといいうのも整合性を缺く。これは、それ自身に混亂を内包した、あいまいな規定であり、現實には充分實施されていなかった。これは當時の錢事情からしても當然であって、清朝の制錢は、多くの地方で未だ流通しておらず、流通している京師をみても、一兩一五〇〇〜一六〇〇文

の賤價であつた。公定錢價での搭放が兵餉の實質切り下げであつた以上、搭收は地方財政に不利であつた。

事實上行なわれなかつただけではない。地方においてまさに錢需要の高まりつつあつた康熙末から雍正の時期においても、かつての銀七錢三搭收規定は完全に無視され、中央の決定は、零星錢糧の錢納さえ、公式に否定してゐた。康熙四三年に湖廣巡撫劉殿衡は、零星錢糧は民便に従ひ碎銀や制錢で輸納することなど四事を請うたが、四事のうちこれだけは承認されなかつた。<sup>(124)</sup>雍正三年、太僕寺卿が、銀七錢三の搭收は本來の規定であることをふまえ、一步退いて小戸該納錢糧銀三(四)錢以下について、民便に従つて銀錢並納とし、存留分として搭放することを請うたが、戸部はこれを否定した。<sup>(125)</sup>理由は、

査するに、錢糧の制錢を交納するは、百姓において易便たるに似たり。但し銀は一定の分兩あり。錢は則ち價に貴賤あり。今、收する所の制錢をもつて存留項下に支銷するは、錢貴の時、兵餉工食に支給すれば、兵丁夫役、自ら欣然として樂從せん。倘し錢價減賤に遇わば、則ち兵役斷じて賤價の錢を領し、その應に得べきの銀兩の數を虧くを肯んぜざらん。州縣もまた未だ必ずしも能く捐資賠補せず、恐るらくは生事を致さん。

であつた。錢流通は不安定で、錢價がはなはだしく分裂してゐる以上、既に「分兩」によつて價值尺度としての地位を確立してゐる銀以外を、國家的支拂い手段とすることはできないという回答である。

錢流通が極く邊境地帯を除いては既に廣まっていた時點でも、こうして收錢は否定された。一錢以下の零星錢糧が、安徽巡撫徐本の請に従つて、傾化の折耗を避けるために收錢することを公式に認められたのは、ようやく雍正十一年六月のことであつた。<sup>(126)</sup>錢流通の擴大とともに錢徵收は廣まり、一錢以下という限定を越えて錢だてで徵收されることも多々あつた。<sup>(127)</sup>しかし乾隆期には、依然として納稅期には錢價が下がるなど、錢を銀に兌換して納入することの支配性を示す事例が<sup>(128)</sup>みられる。

ともあれ錢徵收は公認された。しかし、國家による錢信任という視點からみて、この期の收錢には、二つの注目すべき



點がある。一つは錢價である。雍正一年の規定も含め、從來、搭放・搭收は、一兩一〇〇〇文の官價を原則とした。しかしこれは、一兩八〇〇文前後となった市價の前に不都合であった。乾隆五年に河南巡撫の請に對し、

朕思うに、制錢の價值は、各府州縣畫一なる能わず。卽い一邑の中なるも、早晚の時價もまた相い同じからず。今若し時に隨いて計算すれば、一定の準則なし。

として、時價に應じた折納が準則の喪失となることを憂慮しつつも、皇帝は市場價格に追隨した折納への轉換を一年間試みるよう指示する。<sup>(129)</sup> 翌年の山西の錢納公認の際にも、加耗こみで一兩一〇〇〇文となり、以後、これは常態化する。公定錢價は、名目のうえでも、ここで大きく後退する。<sup>(131)</sup> 皇帝は、やがて錢市場への介入そのものにも消極的となる。<sup>(132)</sup> 錢貴の時期は、公定比價放棄の時期でもあった。

この時期の錢徵收のいま一つの特徴は、徵收された錢が財政に入り込まなかったことである。錢貴・錢不足のため、出来るだけ早く錢を市場にかえす必要のあったことが、直接の理由である。乾隆八年には、福建の存留錢糧は陸續易換して、流通に投すべきことが言われ、<sup>(133)</sup> 二〇年には、三日以内に、牙鋪・典商ではなく錢桌を通じて還流させるよう、詳細化されている。<sup>(134)</sup>

國家への錢支拂いのいま一つの主要ルートである平糶錢も、同様に處理された。康熙六〇年に、錢貴に應じ、京師平糶錢文を市價が平かになるまで易銀解庫することが指示される。<sup>(135)</sup> 雍正八年には兵餉への搭放に繰り込むよう變更されるが、<sup>(136)</sup> 翌年七月には五城錢鋪での兌換が復活し、<sup>(137)</sup> 乾隆期にも何度か確認されている。<sup>(138)</sup> 乾隆一〇年正月には全國的に改めて確認され、これに應えて、これまで收貯してきた甘肅や湖北を含めて、兌換徹底を回報する。<sup>(139)</sup>

兵餉の搭放は、専ら新鑄錢によってなされた。順治初頭の規定によると、寶泉局新鑄錢が兵餉に、寶源局新鑄錢が各工の用に充てられることになっていた。<sup>(140)</sup> しかし錢貴による搭放率引き上げの中で、雍正元年・四年の調整のち、五年には寶源局の錢も工價を除き、全て搭放にまわすことになった。<sup>(141)</sup> 地方における鑄錢も、工料を除けば、主要には兵餉の搭放の

ために費され、残りの若干が兌換に用いられ、逆に搭放分の兵餉は新鑄錢によってまかなわれた。<sup>(142)</sup><sup>(143)</sup>

徴收された錢が財政に組み入れられない場合、地方鑄錢期には新鑄錢によって裏附けられている兵餉とは異り、官俸等への搭放は有名無實化する。浙江では帳簿上は存留項下より官俸に一成搭放されているはずの錢も、実際には全て銀で支給されており、乾隆五年に、實質に合わせて銀表示に改められた。<sup>(144)</sup>

國家による錢の收受には外にも多くの経路があり、錢貴の時代であればこそ州縣にストックされる錢も確かにあったと思われる。しかし大勢としては、國家レベルの錢の動きは、鑄造↓兵餉の搭放、錢糧折收・平糶↓兌換と整理される。搭放と搭收は一組みのことでなく兩者は分斷されていた。搭收は雍正期までは本質的な要素ではなく、乾隆期から廣がっても、本格的には財政に組み入れられなかった。錢は、市場價格に追隨した、地方財政の入り口での受け渡し的手段という性格を、未だ強く持たされていた。錢信任のための錢回收は、康熙時代に一時的にみられた例外的な政策であった。<sup>(145)</sup>この時期までに限れば、<sup>(147)</sup>錢の流れは兵餉を通じた國家から市場へのたれ流し構造であった。順治期・雍正期の舊錢・私錢の回收による改鑄策を除けば、はじめは試行錯誤に満ちてゆるやかに、やがて市場の渴望に應じて激しく、清朝は一方的に錢を市場へと供給し続けた。

#### 四 錢の再生

國家的信任の喪失によって明代中期において流通手段としても解體した錢が、約三〇〇年をかけて再生し、清代中期において、廣範に流通機能を実現するようになった。以上の検討によると、この流通機能の實現は、國家的支拂い性によって保證されたものではなかったし、流通の擴大過程自體、國家による鑄造・供給とは、相對的に獨自に進んだものであった。

國家的支拂いから獨立した貨幣であったため、この期の錢は、基本的に私鑄錢を克服し得なかった。中間的地域を中心

として、錢流通は私鑄錢流通として擴大し、錢貴の時代を導いた。國家による供給擴大以後も私鑄錢は存續し、錢不足緩和のため、あるいは私錢禁止より制錢供給が一義的であるとして、<sup>(148)</sup>異質な錢の存續が公然容認される場合も、ままたつた。乾隆後半期はまた、低錢横溢の時代となる。

この時期の錢は、廣範な流通性にもかかわらず、かつて自らの果たした多様な諸機能を果たし得なかった。順治・康熙の地方錢事情は錢賤として、乾隆期の錢事情は錢貴として認識され、決して銀貴や銀賤とは認識されなかった。かつて價格計數單位としても支配的な地位を錢が持っており、銀の價格をも錢が表示した時代は終り、銀は既にそれ自身が價值となり、「銀は一定の分兩あり。錢は則ち價に貴賤あり」として疑われることがなかった。明代中期以降、銀貴が言われることがあつても、それは米と對比しての銀貴であるか、他の貨幣諸手段の中の銀の地位の支配性を言う場合であつた。錢との關りで銀貴が認識されるようになるのは、恐らく一九世紀以降であらう。少なくとも乾隆のある時期までは、銀と錢の關係は複本位制と言うよりは、相對的に獨立性を持つものの、銀本位制と言うに近かつた。この條件こそ、戶部が零星錢糧徵收への錢の採用をしぶつた理由であり、時價追隨による錢收取や徵收した錢の易換を行なわねばならなかつた理由である。

こうして國家的支拂性の保障のないまま、價值尺度性も低いまま、銀を前提とした流通手段という限定性の内に錢を廣範に復活させたのは、恐らく市場であつた。銀と錢の流通の間には明確な境界はなく、相互に轉換可能であり、次第に錢貴を導いたのは、一面では銀流通の一部の錢による代替であつた。しかし錢がもともと庶民の日常的流通と深い結びつきを持っていたことも事實である。明代においても、錢は零細都市生活者の生計の手段であつたし、また米穀市場と直結して<sup>(149)</sup>いた。乾隆の錢貴が農產物市場と結びついていたことも、既に指摘されている。<sup>(150)</sup>

他方、錢信任が解體した時、米や鹽と同様の現物貨幣としての信頼性を以て、銀は各地に機能し得たが、秤量貨幣としての銀は、農村に定着し、日常的流通の發展を支えるには、必ずしも好適ではなかつたと考えられる。「江南は則ち民多

く字を識り、村農の孺子も、多く平色書算を知る」という説明には無理があり、「銀色平法、鄉愚能く辨識すること罕れ」あるいは「鄉民は銀色戯頭を諳んぜず」というのが事實に近いであろう。多くの資料が、錢の便易を錢への轉換の理由とする。

錢流通擴大は、それを必要とする市場の擴大と深い関りを持ち、明から清への錢流通擴大の地域的展開過程も、それを示している。多くの貨幣機能を銀に譲りつつ、流通手段として展開をとげ、明代の不安定性を克服して行った錢は、主穀・棉花・大豆（豆餅）などを主體とするゆるやかな全國市場の形成を、貨幣史的に表現するものであったと考えられる。

## 註

(1) 「明代中期における京師の錢法」熊本大學『文學部論叢』

二九 一九八九年。「專制國家と財政・貨幣」「明清時代における錢經濟の發達」「中國專制國家と社會統合——中國史像の再構成Ⅱ——」一九九〇年。「初期銀財政の歲出入構造」

『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』下一九九〇年。

(2) 論者を幾人かあげる。王家屏『復宿山房集』卷三六 答李

撫臺。譚綸『明實錄』隆慶三年七月辛卯。靳學顏「講求財用

疏」『皇明經世文編』卷二九九。魏時亮（胡我珉『錢通』卷

二所收の疏）。周良寅「疏通錢法以裕經用疏」『萬曆疏鈔』卷

二七 錢鹽類。張學顏「萬曆會計錄」卷四一 錢法の按語。

(3) 『萬曆疏鈔』卷二五 財計「仰承明旨敬陳理財末議以備采擇疏」。

(4) 『顧亭林文集』卷六 錢法論。

(5) 前掲「明代中期における京師の錢法」。

(6) 『明實錄』萬曆四年四月壬申。

(7) 『明實錄』萬曆五年十一月乙亥、『續文獻通考』卷一八 錢幣考 萬曆六年。

(8) 『欽定續文獻通考』卷一一 錢幣五。

(9) 例えば、葛守禮『葛端肅公集』卷二「廣鑄制錢足用疏」には次のようにある。

我太祖之有天下也。即鑄洪武制錢。疊朝因之。永樂宣德弘治嘉靖。皆有制錢。但皆鑄於京師。流布未廣。是以天下省分。有舊錢者則用。無者遂止用銀。……至如北直隸河南山東用錢。又苦錢不足用。盜鑄之人。因而竊大利。……法在必禁。然制錢不足用。雖欲禁私鑄。不可得也。故總民生國計物理事勢觀之。非廣鑄不可也。

そのほか、『錢通』卷二 王萬祚疏、傅宗皐疏。丁賓『丁清惠公遺集』卷二「留都錢法大壞疏」、など。

(10) 『明實錄』萬曆四年二月乙酉。  
(11) 『明實錄』萬曆四年四月壬申。

(12) 潘季馴『潘司空奏疏』卷五「條議錢法疏」など。

(13) 陶允宜『鏡心堂草』卷三「答張使君問民兵書」。

承平以來。給賞絕矣。所賴以供朝夕。備寒暑。逮父母妻孥者。獨銀二分三釐耳。一旦而減爲二分。是去五之二也。而所爲二分者。又以三分之一爲搭錢。夫浙不便錢也。浙而用錢。則二十爲一分。而官法爲十。又去六之一也。

この兵變と錢については、このほか、兵變の平定者である張佳胤の『居來先生集』附錄に收められた「張大司馬定浙二亂志」「大司馬張公經略浙鎮兵變始末」など参照。

(14) 『明實錄』萬曆一〇年九月辛酉。

(15) 『明實錄』萬曆一三年九月壬申。

(16) 『續文獻通考』卷一八 錢幣 萬曆二七年四月。『明實錄』萬曆二八年三月丁未。

(17) 『錢通』卷一 王萬祚疏。

(18) 『錢通』卷二 李雲鵠疏。

(19) 『錢通』卷二 王萬祚疏。

(20) 『談往』は、京師の錢價が六〇〇文一兩で殆んど變化しなかったと言う。

(21) 『明實錄』萬曆一三年八月丁卯。

(22) 『明實錄』萬曆三九年一〇月戊子。

(23) 王逋『剡庵瑣語』。

自崇禎六七年後。其價漸輕。至亡國時。京錢百文。值銀五文。皮錢百文。值銀四分。甚至崇禎通寶。民間絕不行使。

本朝順治四五年間。崇禎錢百文。止值銀一分。每錢重一釐。值銀二分五釐。

葉夢珠『閔世編』卷七「錢法」は、崇禎初めまで錢質低下しつつも、嘉靖、天啓錢と閒雜通行していた崇禎錢が、やがて減價していったことを記した後、次のように言う。

迨乎乙酉。大兵既下江南。前朝之錢。廢而不用。是時每千值銀不過一錢二分。較之銅價。且不及。而錢之低薄。雖鵝眼纒纒。不能喻矣。

葉紹袁『啓禎記聞錄』も、順治四年のこととして、行使を禁じられ銅材としてのみ扱われるようになった崇禎錢について記す。

(24) 『啓禎記聞錄』

(丙戌歲——順治三年) 然錢價每千易銀二錢。賤已極矣。獨順治新錢。必欲每千紋銀一兩四錢。又嫌太貴。官欲通行。而民不便。未能奉令也。

『閔世編』卷七 錢法。

順治通寶初頒。官實每千准銀一兩。然當錢法敝極之後。奉行甚難。……而民間所用。惟七一色之低銀。……至〔康熙〕十二年甲寅四月。聞八閩之變。三吳錢價頓減。初猶五六錢一千。後直遞減至三錢。積錢之家。坐而日困。典舖尤甚。有司雖嚴禁曲喻之。而不可挽。十五年以後。封疆漸寧。錢價以次漸長。

(25) 『明實錄』萬曆四八年七月壬寅。

(26) 『明實錄』萬曆一五年六月辛未。

(27) 劉堯誨『大司馬劉凝齋先生虛籟集』卷一「制錢」。

- (28) 『萬曆會計錄』卷四一 錢法 萬曆五年戶部尚書殷正茂疏。京城內外。一應大小人家。無錢必買於各舖。有錢必賣於各舖。有等姦商。積某項錢多。遂倡言某錢不行。轉相煽惑。愚弄小民。既貴賣其所積。以圖目前之利。又賤收其所棄。以罔他日之利。錢之壅滯。大端由此。
- (29) 前掲『明代中期における京師の錢法』。
- (30) こうした錢流通の限定性については、さしあたり『明夷待訪錄』財計一 參照。
- (31) 清末における銀と錢の流通圏の概括は、『張文襄公全集』卷六三「虛定金價改用金幣不合情勢摺」參照。
- (32) 江浙閩沿海地方における錢行使擴大については『錫金識小錄』卷一 備參上「交易銀錢」、『清實錄』乾隆八年八月是月、同九年七月甲申、など。
- (33) 「清代雍正朝における通貨問題」『東洋史研究』一八一—一九五九年。
- (34) 「乾隆の錢貴」『東洋史研究』四五—四 一九八七年。また岸本美緒氏の「清代の『七折錢』慣行について」『お茶の水史學』三〇 一九八七年にも、この錢流通への轉換が論じられている。
- (35) 『皇朝文獻通考』卷一三 錢幣一 順治八年。
- (36) 『清代檔案史料叢編』第七輯「順治年間制錢的鼓鑄」(以下『檔案叢編』と略記) 所收、順治四年六月二日 偏沅巡撫高斗光題本。
- (37) 『檔案叢編』順治四年四月一三日 河南巡撫吳景道題本、『明清檔案』順治五年一月 閩浙總督陳錦揚帖、『明清檔案』順治一三年三月 兩江總督馬鳴鳳揭帖、など。
- (38) 『檔案叢編』順治一三年三月一七日 戶部尚書戴明說題本。
- (39) 『歷史檔案』一九八四年一期「康熙八至十二年有關鼓鑄的御史奏章」(以下『歷史檔案』八四—一と略記) 康熙九年二月二十四日 戶科給事中姚文然題本、康熙八年二月二日刑科給事中張登選題本。
- (40) 康熙二五年に銅の買い上げ價格は一斤一錢に引き上げられ、『清實錄』康熙二五年四月戊子、しばしば銅價格の上昇と理解されるが、實際には既存の價格差調整に過ぎず、この價格さえ、『康熙起居注』二五年二月一〇日、同二月一二日にあるような銅差の實際の買い上げ價格一錢五く六分から七く八分、を償わぬものであった。
- (41) 福建については『明清檔案』順治九年五月 福建巡按王應元揭帖、『明清史料』己編第三本 順治一三年二月二日 福建巡撫宜永貴揭帖、河南については『檔案叢編』順治一三年閏五月一三日 河南巡撫允得時題本、『檔案叢編』順治一三年四月二九日 河南巡撫允得時題本、など。
- (42) 『檔案叢編』順治一三年三月一七日 戶部尚書戴明說題本に引用された順治一一年の江南の銅材調達をめぐる報告。
- (43) 『清實錄』順治八年一〇月癸亥。
- (44) 『檔案叢編』順治九年七月二日 戶部尚書車克題本。また『檔案叢編』順治一二年正月二六日 戶部尚書車克題本は、各地停鑄經過を示す。
- (45) 『清實錄』順治一〇年六月己未。
- (46) 『清實錄』順治一四年九月己巳。

(47) 『明清檔案』順治一五年二月 督理京省錢法杜傳祐揭帖。  
 (48) 『光緒大清會典事例』(以下『清會典』と略記) 卷二一九 直省鼓鑄。

(49) 同前。

(50) 同前。

(51) 『歷史檔案』八四一 康熙八年二月一日 刑科給事中張登選題本。

(52) 同(39)。

(53) 『清會典』卷二一九 直省鼓鑄。

(54) 『皇朝文獻通考』卷二三 錢幣一 順治五年。

(55) 『明清檔案』順治元年七月二十六日 工部左侍郎葉初春啓、に據ると、一兩一五〇〇文であった錢價が一〇八〇文にまで上昇した。これが順治二年に新錢一兩七〇〇文と設定された理由であり、この基調は、『清實錄』順治三年五月庚戌の「錢漸く廣く、舊錢日びに賤し」までは續いていたと思われる。

(56) 京師における錢價の推移を示す資料は左記のとおり。順治八年正月二七日一兩一四〇〇文(『檔案叢編』戸部尚書巴哈納題本)。九年五月二八日一兩一六〇〇文(『明清檔案』福建道試監察御史石應泰題本)。九年七月一日一兩一六〇〇文(『檔案叢編』戸部尚書車克題本)。康熙八年一月一日一七錢一〇〇〇文(『歷史檔案』八四一 刑科給事中張登選題本)。九年二月二四日八錢二〇〇〇文(『歷史檔案』八四一 戶科給事中姚文然題本)。一二年一月二日七〇八錢一〇〇〇文(『歷史檔案』八四一 巡視中城御史鞠珣題本)。

(57) 『檔案叢編』順治九年七月一日 戸部尚書車克題本。

(58) 『清實錄』順治一四年九月己巳。

(59) 『皇朝通典』卷一〇 錢幣。

(60) 註(39)。

(61)

元	7,1664
2	44,3752
3	62,4824
4	133,3385
5	144,9494
6	109,6910
7	168,2425
8	243,0509
9	209,7633
10	252,1664
11	248,8544
12	241,3878
13	260,4872
14	234,0871
15	14,0174
16	19,1806
17	28,0394
18	29,1585

單位貫。貫未満四捨五入

(62) 彭信威『中國貨幣史』一九八八年 八八三頁。

(63) 『檔案叢編』順治一二年正月二五日 督理京省錢法戸部右侍郎郝杰題本には、順治一一年分の寶泉局鑄錢の收支が、四柱式で詳細に示される。これによると、一〇年からの存留銅一四一萬餘斤に一一年の新收銅三〇二萬餘斤を加え、うち二二〇萬斤を用いて、工料を含めて二四萬七八〇八貫の錢を鑄造した。同様に『檔案叢編』順治一三年二月一〇日 督理京省錢法戸部右侍郎朱之弼題本によると一二年には二五萬二三〇貫餘、同順治一八年三月一日 戸部右尚書車克題本によると、一七年に二三萬一三一四貫餘を鑄造している。

(64) 地方局停鑄に應じて順治八年から九年へ、一四年から一五一年に統計値は銳減し、復開に應じて一〇年に増加している。これは廢銅による雍正期の地方開鑄にも妥當する。

(65) 『檔案叢編』順治八年正月二八日江南總督馬鳴珮題本、同順治九年六月一六日總督江南江西等馬國柱題本、同順治四年二月九日陝西等巡撫雷興題本、同順治八年二月一日總督宣大山西等佟養量題本、など。

(66) 買い上げ銅價格は、一斤六分五厘に一定ではなく、廢銅價格は(41)の諸史料などにもあるように、これよりも低い水準で各種の段階があるなど、鑄息と鑄造額との正確な比例を損う要因は多々ある。

(67) 『明清史料』己編第三本 順治一三年二月二日 福建巡撫宜永貴揭帖。

(68) 日本側からの資料による諸研究の結果が、任鴻章『近世日本と日中貿易』一九八八年、にまとめられている。

(69) 詳細は不明であるが、『清實錄』各年末の鑄錢額、『皇朝文獻通考』卷一四 錢幣二、の卷末における總括、『清會典』戶部・工部における増卯・每卯銅斤數の推移などの記述は、大勢として一致している。

(70) 他の時期の檔案史料からみて、開鑄決定から開鑄までには、一年前後の期間がある。

(71) 『清史列傳』卷九 吳興祚。

(72) 『清史列傳』卷一〇 徐乾學、『東華錄』康熙二十四年七月、

『康熙起居注』二十四年五月二日。

(73) 『東華錄』康熙二十七年一月。

(74) 『康熙起居注』二十四年五月二十九日、同二五年三月一日。

(75) 『清史列傳』卷一一 范承勳。

(76) 『清史列傳』卷一二 蕭永藻。

(77) 『清實錄』康熙三十七年五月己亥。

(78) 『清史列傳』卷一二 蕭永藻。

(79) 『皇朝文獻通考』卷一四 錢幣二。

(80) 『清會典』卷二二〇 錢價。

(81) 『清實錄』康熙六一年九月戊子。

(82) 『康熙起居注』五三年六月一九日。

(83) 『宮中檔雍正朝奏摺』(以下、康熙朝・乾隆朝なども含めて『宮中檔』と略記) 雍正六年三月四日の河南總督田文鏡奏摺などに引用された諭旨。

(84) 『清實錄』康熙四五年四月己亥、七月辛酉、『康熙起居注』四月九日、一二日、五月一日、七月六日、など。

(85) 『皇朝文獻通考』卷一四 錢幣二。

(86) 『清實錄』雍正元年七月壬午。同雍正五年正月壬子。『宮中檔』雍正七年九月一九日 雲南總督鄂爾泰奏摺。

(87) 『康熙朝漢文硃批奏摺彙編』康熙四四年一月六日 四川巡撫年羹堯奏摺。

(88) 『宮中檔』雍正三年五月二六日 雲貴總督高其倬奏摺、同雍正三年一月一二日 雲貴總督高其倬奏摺、同雍正四年三月八日 雲南布政使常德壽奏摺、同雍正七年一月七日 雲南巡撫沈廷正奏摺。

(89) 『宮中檔』雍正六年一月一六日 署甘肅巡撫西安布政使張廷棟奏摺、同雍正一二年九月二二日 雲南巡撫張允隨奏摺に示された陝西の錢貴など。

(90) 『宮中檔』雍正二年一月二二日 雲貴總督高其倬奏摺。

(91) 『清實錄』雍正九年七月戊辰。

(92) 『清會典』卷二四 辦銅、『清實錄』雍正四年正月己未、同五年九月乙卯、など。

(93) 『皇朝文獻通考』卷一五 錢幣三。

(94) 同前二二年條。



(95) 『明清檔案』雍正一〇年十一月二日 江西巡撫謝旻揭帖。  
 (96) 『明清檔案』雍正八年八月三〇日 江寧巡撫尹繼善揭帖によると、寶泉局成規では、廢銅一二萬斤から、工料を含めて一萬二四八〇貫、工料支拂い後一萬一一一貫餘を鑄出することになっていた。

(97) 『明清檔案』雍正一〇年五月九日 湖南巡撫趙弘恩揭帖。

(98) 『宮中檔』雍正六年四月一日 兩廣總督孔毓珣奏摺、同雍正七年三月三日 署理廣東布政使王士俊奏摺。また河南については、『宮中檔』雍正六年三月四日 河南總督田文鏡奏摺。

(99) 『清實錄』年末の鑄錢數は、京師での廢銅による鑄錢で、雍正中期に増加しているが、九年と一〇年に、各々一〇五萬貫 九一萬貫と突出している。地方の廢銅による鑄錢が組み入れられたためと考えられる。

(100) 『宮中檔』雍正七年三月三日 署理廣東布政使王士俊奏摺、同雍正五年一〇月一八日 江西巡撫布蘭泰奏摺、など。

(101) 『宮中檔』雍正五年正月二八日 蘇州巡撫陳時夏奏摺、同雍正一三年六月四日 直隸總督李衛奏摺、前掲『近世日本と日中貿易』。

(102) 雍正初頭における滇銅生産の依然たる不充分は、『宮中檔』雍正元年六月二日 刑科給事中趙殿最奏摺など。雍正五六年における急増ぶりは、『清實錄』雍正五年六月戊申、『宮中檔』雍正六年四月二六日 雲南總督鄂爾泰奏摺、など。

(103) 『明清檔案』乾隆二年七月三日 大學士管戶部張廷玉題本によると、寶泉局は雍正一三年には八四八萬餘斤、乾隆元年には一五二三萬餘斤の銅鉛を繰り越した。これはそれぞれ、

約二年分、三・七年分に相當する。

(104) 『明清檔案』雍正八年八月三〇日 江寧巡撫尹繼善揭帖。

(105) 『宮中檔』雍正一三年閏四月一日 蘇州按察使郭朝鼎奏摺。

(106) 『清實錄』雍正一三年一〇月己卯。

(107) 錢貴とそれへの對策が地方から上奏されて『清實錄』に收められる順序は次のとおり。直隸元年一〇月戊子、江西二年六月己巳、江蘇二年一二月是月、湖廣三年六月戊戌、臺灣四年九月己酉、浙江五年正月甲寅、河南五年四月丙戌、福建六年六月辛丑、陝西・山西六年九月己卯、貴州九年五月辛丑。錢貴深化と對策報告は勿論一致しないが、一定の傾向性がみられる。

(108) 乾隆一八年五月八月にかけて、『宮中檔』には、全國各省からの錢價報告が残されている。既に錢貴の峠を過ぎ始めた時點での報告であり、かつ錢貴報告を迴避しようとする地方官の意圖が隨所にみられるが、經濟水準に比して錢供給の不充分的な江蘇や安徽に高く、四川・貴州などに低い傾向がみられる。

(109) この間の京師鑄錢動態については、『皇朝文獻通考』に、ほぼ整理されている。

(110) 各地の鑄造經緯について、『宮中檔』『清實錄』『清會典』『皇朝文獻通考』などを對校検討し、二五年ごろの鑄造定額を推計したのが左の表である。雲南については嚴中平『雲南銅政考』一九五七年、の推計によった。なお嚴氏によると雲南における鑄錢ピークは乾隆三二年の九二萬貫。多くの資料

は應鑄額で、實際の鑄出額とは必ずしも一致せず、時に工料抜きの値を含むと考えられ、一つの目安に過ぎない。

京師	145,3920
直隸	4,7923
山西	4,4180
陝西	9,3618
江蘇	11,1820
浙江	12,8613
江西	6,9600
湖北	9,8300
湖南	16,8758
福建	4,5000
四川	29,1200
雲南	72,8969
貴州	17,2000
廣東	?
廣西	9,6000
計	354,9901+

(111) 『康熙起居注』五三年正月二日。

(112) 雍正期における私鑄錢問題については、前掲佐伯「清代雍正朝における通貨問題」に詳しい。

(113) 『清實錄』乾隆四年九月己酉。

(114) 『宮中檔』雍正五年一〇月一八日 江西巡撫布蘭泰奏摺。

(115) 『宮中檔』雍正一三年八月四日 湖北巡撫吳應棻奏摺。『清實錄』乾隆六年二月是月(湖廣總督那蘇圖)、『宮中檔』雍正三年三月一日 福建漳州總兵官高世定(廣西について)、『清實錄』雍正七年正月甲戌(廣西左江鎮總兵官齊元輔)、『宮中檔』雍正七年三月三日 署理廣東布政使王士俊、『清實錄』雍正四年一〇月壬午(山西總督伊都立)、など。

(116) 『宮中檔』雍正五年一〇月一八日 江西巡撫布蘭泰奏摺によると、同地の低錢は一〇〇〇文で四斤ばかり、爛銅價格にすると銀二錢に過ぎぬが、市中では一〇〇〇文五錢二三分から七七八分で通用していた。

(117) 『宮中檔』雍正一三年八月四日 湖北巡撫吳應棻奏摺に引用された上諭参照。

(118) 『宮中檔』雍正八年正月一三日 雲南總督鄂爾泰奏摺、『清實錄』乾隆九年五月辛丑。

(119) 『願亭林文集』卷一 錢糧論。

(120) 『清會典』卷二〇 錢價。

(121) 以上、『清會典』卷二二〇 搭放省餉。

(122) 『閱世編』卷七 錢法。

(123) 『歷史檔案』八四一 康熙一二年一〇月二日 巡視中城御史鞠珣題本。

(124) 『東華錄』康熙四三年一二月。

(125) 『宮中檔』雍正三年一二月二三日 總理戶部事務親王允祥等奏摺。

(126) 『清實錄』雍正一一年六月壬子。

(127) 『清實錄』乾隆元年一〇月戊子(直隸永平府)、同乾隆一〇年一二月己卯(陝西)、など。

(128) 『宮中檔』乾隆一七年九月二日 直隸總督方觀承奏摺、同乾隆一八年五月二日 署理山東巡撫楊應琚奏摺。ほかに銀兌換納入を言う『宮中檔』乾隆一七年九月三日 廣西巡撫定長奏摺、『清實錄』乾隆一三年閏七月己巳(山東)。

(129) 『清實錄』乾隆五年四月丙戌。

(130) 『清實錄』乾隆六年九月己卯。また註(127) 乾隆一〇年一二月己卯。

(131) 兵餉への搭放には一兩一〇〇〇文の公定錢價がなお續くが、國家による錢價への影響力行使の面からは、明代以降多くの論者が言い續けてきたように、放出よりも回收が規定的である。

(132) 『清實錄』乾隆一九年四月是月。

(133) 『清實錄』乾隆八年八月是月。

(134) 『清實錄』乾隆二〇年八月是月。

(135) 『清會典』卷二二〇 錢價。

(136) 『清實錄』雍正八年二月庚戌。

(137) 『清實錄』雍正九年七月戊辰。

(138) 『清實錄』乾隆二年五月癸丑、三年三月己巳、三年六月甲申。

(139) 『清實錄』乾隆一〇年正月辛巳。

(140) 『皇朝文獻通考』卷一三 錢幣一。

(141) 『清會典』卷八九一 出錢。

(142) 地方における鑄錢と搭放のバランスの事例をあげると次のようである。

廣西…『清實錄』乾隆一四年八月乙未

鑄錢九萬六〇〇〇貫→兵餉六萬二〇〇〇貫+工料局費錢

一萬三六八〇貫+兌換二萬〇三一八貫零。

陝西…『清實錄』乾隆一六年一月己卯

鑄錢九萬三六八貫三〇〇零→兵餉六萬八一六九貫四〇

〇文+工食雜費一萬三五二貫+兌換一萬一八九六貫九〇

〇文。

(143) 後には河工等への搭放も始る。

(144) 『清實錄』乾隆五年七月甲戌。

(145) 例えば『清實錄』乾隆二年二月是月、五年六月辛未・甲戌などの江蘇漕米津貼耗費銀など。この際も地方官衙に錢が滞留せぬよう配慮された。

(146) 『清實錄』康熙四五年四月己亥、七月辛酉、など。

(147) 乾隆末期になると、錢價下落のため兌換も圓滑でなくなり、地方錢ストックもまた、かなりの量で形成されるようになる。『清實錄』乾隆五四年九月是月。

(148) 『清實錄』乾隆一四年七月庚午にあるように、寛永通寶の流入は、錢貴を恐れてしばらく黙認されたし、『宮中檔』乾隆一九年四月一日附江西巡撫范時綬の、嚴禁私錢の請を、皇帝は官錢充裕こそが解決策として否定し、この旨各督撫へ指示している(『清實錄』乾隆一九年閏四月壬子)。

(149) 前掲「明清時代における錢流通の發達」。

(150) 前掲黑田「乾隆の錢貴」。

(151) 『宮中檔』乾隆一八年七月一三日 署兩江總督鄂容安等奏摺。

(152) 『宮中檔』乾隆一七年九月六日 直隸總督方觀承奏摺。

(153) 『宮中檔』乾隆一八年五月一〇日 河南巡撫蔣炳奏摺。

附表A 順治14年地方局鑄息

錢局名	鑄造期間	息銀(兩)
山東省	正月～11月	3,2985
山西省	正月～12月2日	1,1588
臨清鎮	正月～11月	1,4935
陽和鎮	正月～11月	1,0746
河南省	正月～12月	8103
陝西省	正月～12月9日	1,1121
湖廣省	正月～12月23日	1,1157
宣府鎮	正月～10月25日	9257
薊州鎮	正月～12月	8146
浙江省	正月～12月	1,5220
江南省	正月～10月	1,4799
江西省	4月1日～12月	1922
計		14,9978

『明清檔案』第33冊 順治15年12月督理京省錢法杜篤祐揭帖より。兩未滿四捨五入。

附表B 寶泉局・江寧局及び順治8年停鑄地方局等鑄息

錢局名	期 間	鑄息	期 間	鑄息	期間 鑄息
寶泉	元年5月～7年終	101,2672兩	～8年終	8,9287兩	～9年終 8,3668兩
江南	3年6月～7年終	93,0808兩	～8年10月	7,2103兩	～9年終 2,3982兩
臨清	2年5月～7年終	5,5706兩	～8年10月	1,3833兩	
密鎮	2年5月～7年11月	1,9498兩	7年12月～8年10月	2043兩	
薊鎮	7年12月		～8年10月	1991兩	
陽和	7年2月～7年終	5613兩	～8年10月	8084兩	
宣府	元年11月～7年終	7,2100兩	～8年10月	6946兩	
鄖襄	5年10月～6年11月	1,1453兩	7年11月～8年11月	9963兩	
荊州	5年4月～7年6月	1,0741兩	～8年7月	6081兩	
延綏	3年6月～4年4月	2648兩			
大同	元年10月～5年6月	11,8327兩			
甘肅	4年6月～4年9月	1641兩			

『檔案叢編』順治11年正月26日 戶部尚書車克題本より。錢以下四捨五入。

文原檔 (owned by the National Palace Museum at Taipei), which was published as *Chiu Man Chou Tang* 舊滿洲檔. Many things in this period are clarified through Yüan Tang. To examine Lao Tang, I investigated Huang Tzu Tang 黃字檔, a collection of ejehe (rescripts) in Yüan Tang. As a result I pointed out the need to clarify later amendments, such as unknown deletions, rewritings, corrections, and so on. To reexamine *Lao Tang* which records the amendments made to Huang Tzu Tang, we must restore the original copy of Huang Tzu Tang without these amendments and clarify the age when it was amended. While I restored the ejehe about Asan brothers in Huang Tzu Tang supposed to be the one of the 11th year of T'ienming 天命 by *Lao Tang* and clarified the process of amending to it, I compared their careers. Then the following becomes clear. Huang Tzu Tang is likely to have been copied in the 8th month of the 10th year of T'ienming. It is clear that the amendments made to it reached the 8th month of the 3rd year of T'ients'ung 天聰. The ejehe of Huang Tzu Tang tells the situation of the 3rd year of T'ients'ung against the accounts of *Lao Tang*.

## THE STATE AND CASH IN THE EARLY QING PERIOD

ADACHI Keiji

When the Ming dynasty adopted the silver finance and gave up the system of returning cash to the national finance, the confidence to the cash was lost and the circulation of cash was on the verge of dissolution. The situation rose that privately minted cash overflowed on the market, and specific cash was preferred within narrow areas, with unstable fluctuation. It became clear that cash did not circulate but that low-grade silver, rice, salt and so on circulated except advanced areas. During the three hundred years from the middle Ming period to the middle Qing period, the circulation of cash was reexpanded while silver was the standard of value. While the cash control by the Qing dynasty was not trusted fully and the

coinage of cash in the provinces continued to be passive, the circulation of cash came to expand the privately minted cash from the outskirts of advanced areas. Moreover this expansion was the process without the structure of trusting cash through payment to the state as it had been, and that the formerly cash, which attached the greatest importance to payment to the state, came to regenerate as the distribution measure backed by the rural market under the system of the one-sided supply of cash.

## **THE CHINESE INDUSTRIAL COOPERATIVE MOVEMENT IN THE SHAN-GAN-NING BORDER REGION 陝甘寧邊區**

KIKUCHI Kazutaka

The Chinese Industrial Cooperative Movement (C. I. C.) was an industrial production movement founded to resist the Japanese invasion in August, 1938. It was characterised by having the democratic faction as its nucleus, involving both the Nationalist and the Communist parties and serving as an Anti Japanese United National Front. This study focuses on the background of founding, the development and the significance of the C. I. C. in the Communist Party area in contrast with the Nationalist Party areas, and the results can be summarised as follows:

- (1) The C. I. C. played an important role in the formation of an industrial base in the Communist Party area.
- (2) As a United Front Organization it was able to elicit support and coax funds from merchants and landlords.
- (3) Due to over strong ties with the Communist Party government, independent management by the C. I. C. retroceded to a greater extent than in the Nationalist Party areas.
- (4) It played an especially important role in the fields of chemicals, papermaking, drugs and other manufactures, and these activities grew to become the major industries of the Communist Party area.